

# 白金葎

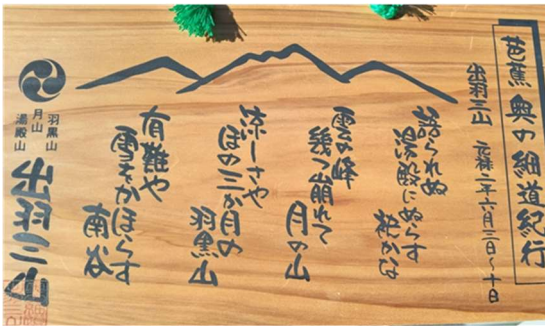
THE  
SHIROGANE  
YOSHI



2025/3/20 の白金葎



2025/2/27 福山城



出羽三山の芭蕉の句 (1689)



中原淳一の挿絵三千子 (1985)

茎立に遅速の主張あるならむ  
袴着け靴を穿ちて卒業す  
片減りの靴揃へある花蒔  
束の間の空なる時や卒業子

璃子 (穴まどひ平 21) 高志選  
" ( " ) "  
" ( " ) みち選  
" ( " ) "

令和 7 年 (2025)

3 月号

1 6 2 号

定例会 (4月の兼題…チューリップ、仏生会灌仏会)

四月十八日 (金) アビスタ第三会議室 12〜15

五月十六日 (金) アビスタ第三会議室 12〜15

六月二十日 (金) アビスタ第五会議室 12〜15

三月句会報 (25/3/21 (春興、土筆) 太字は当日句

光成高志

接骨木にわとこの蕾QRコード付け

茎立や老人ホーム鉢のもの

春の鶉が喉を振はせ何思ふ

土筆出づ先週何もなき土手に

春興や電車を追って歩みたる

早も皆ほほけてをりぬ土筆原

光みち

春愉し「のぞみ」の窓に巨き富士

啓蟄や犬立ち止ること多し

飛んでゆくボールは外野土筆生ふ

弁当を開く畑に初蝶来

長閑しやベンチペンキの塗り立てと

春興や頭なでれば笑ふ稚児

浅野正美

春の雪花束届く誕生日

幼き日土手にあちこち土筆伊出づ

春彼岸線香くゆる慰霊祭

三年で20センチ伸び卒業す

春興や連なる若芽枯れ枝に

つくしんぼ土を持ち上げ春のぞく

田宮敦子

残り鴨一直線に水脈残す

木々芽吹き少年達がボール蹴る

磯渡り伊予の青石春の風

土筆探し多摩川土手を歩きをり

春興や眺めて楽し子供絵

山尾万世遊

麗らゝかや見渡す尾根に山娘

野遊びのコース案内の若き後家

峰駆けて手をとる後家を手放さず

下山路に後家を守り朴の花に抱く

若後家を買ってやりたる春シヨール

佐々木由紀子

公園の斜面いっぱいつくしかな

つくし出て背の高いの低いのと

夕暮れの関東平野春は逝く

梅の花空の青さの中にあり

春興や畦道の草生き生きと

春光に輝く大地ねぎ坊主

利根堤膝まげ見れば土筆あり

散歩道山裾見れば露の臺

潮の香や朝市歩き春愉し

梅の花赤白赤と咲き乱れ

春霞利根堤先筑波山

春畑に緑畦道目につきて

162号選句一覽 兎は高志選。 兎は特選

にわとこ  
①接骨木の蕾QRコード付け

②春愉し「のぞみ」の窓に巨き富士

③春の雪花束届く誕生日

残り鴨一直線に水脈残す

麗らかや見渡す尾根に山娘

④公園の斜面いっばいつくしかな

⑤利根堤膝まげ見れば土筆あり

⑥早も皆ほほけてをりぬ土筆原

⑦茎立や老人ホーム鉢のもの

⑧啓蟄や犬立ち止ること多し

⑨幼き日土手にあちこち土筆出づ

⑩木々芽吹き少年達がボール蹴る

野遊びのコース案内の若き後家

山下寿幸

兎つくし出て背の高いの低いのと

散歩道山裾見れば露の臺

春畑に緑畦道目につきて

①春の鵜が喉を振はせ何思ふ

②春飛んでゆくボールは外野土筆生ふ

③春彼岸線香くゆる慰霊祭

④磯渡り伊予の青石春の風

峰かけて手をとる後家を手放さず

⑤夕暮れの関東平野春は逝く

⑥春愉し朝市歩き潮香り↓潮の香や朝市歩き春愉し

⑦つくしんぼ土を持ち上げ春のぞく

⑧土筆出づ先週何もなき土手に

⑨弁当を開く畑に初蝶来

⑩三年で20センチ伸び卒業す

中学の三年間に20センチ背が伸びて卒業したお孫さん、驚き且うれしい気持ち。心は書いてないのがいいのです。

⑪土筆探し多摩川土手を歩きをり

⑫山路に後家を守り朴の花に抱く

⑬梅の花赤白赤と咲き乱れ

⑭春興や頭なでれば笑ふ稚児

⑮春興や電車を追って歩みたる

⑯長閑しやベンチペンキの塗り立てと

春興や連なる若芽枯れ枝に

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 春興や眺めて楽し子供の絵  
若後家を買ってやりたる春シヨール

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 春興や畦道の草生き生きと

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 春霞利根堤先筑波山

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 春光に輝く大地ねぎ坊主

藤原秀臣エッセイ (15) 人間の修練—時間と暇

時間と暇があれば人間何をするだろうか。忙しく目的をもって働く人、探求心をもって真摯に学ぶ人、趣味に没頭する人と時間はいくらでも欲しいと希求する人が多いことだろう。人間、誰にとつても時間を惜しんで努力し精進することは尊いことである。しかし働き詰めで休息がなければ身体も精神も疲弊するに違いない。普通の人間であれば、どこかで息抜きして生気を養い、趣味で生活に潤いを持たせ気分転換を図っていると思われる。82歳を超した自分の現状では、生業としての仕事が終わる、暇と時間が有り余っている。どうやってそれを有意義に使うことができるのかは、これからの高齢者一般の生き方を含めて新たな課題でもある。歳を重ねてある日から、自宅で妻と過ごすゆるい時間が増えて生活は一変した。それが、加齢という避けがたい空しい気持ちさをさらに増幅させる。これは誰でも通る道なのだろうか、各

人各様に未知の暮らしをそれぞれの信念や思い入れにより凌いで生きていかなければならない。しかしその基盤として今後とも一番大切なのは健康であることは間違いない事実である。二番目は欲しいものを手にすることができるとある程度のお金だろうか。お金は長い人生において価値あるものであり、ある程度の幸せを満たすことができる大切なものである。三番目は心を癒し人生を豊かにする人とのコミュニケーションや友人との交流であり、4番目は最も身近な妻や子供、家族に恵まれることだろうか。生業を辞めてから半年が過ぎ去ったが、何より寂しいのは貯金を取り崩しながら年金生活になったことだろうか。当たり前前のことなのだが、いざ働いて収入を得るといふ人生のリズムが消失することは大きな変革であり精神的な苦痛でもある。生活にゆとりを与え豊かな心を醸成するためにもお金は必要であり、大切なものであることを改めて痛感する。自分の生活を維持するための貯えを手元にある程度のまとまったお金として残さなかったことには若干の悔いが残る。最近では日常的に無駄遣いはしないように心掛けているが、生活に潤いと余裕が無くなっている感が強い。これからは何とか少しずつでも自分のお金を貯える必要がある。お金はいくらあっても邪魔にはな

らないし心を豊かにする妙薬である。これからの心がけとしては、何とか少しづつでもお金を貯めて有効に使うことを考えなくてはならない。生活が一変したとはいえ、時間があることは大事なことであり有難いことだ。その時間を有意義に使うことはこれからの人生における大きな課題である。時間を有効に使うためには趣味も大切である。現在、趣味で水彩画をやり俳句の会に参加しジムで太極拳と運動も励行し、音楽としてウクレレ教室に通い、読書にも親しむということである程度時間を有意義に使う努力はしている。それぞれの趣味の活動で多くの仲間と接するが、心を通じ合える友人があるとはなかなか言い難いものがある。やはりコミュニケーションを図り切磋琢磨できる友人や知人は身近に居て欲しいものだ。

### 俳窓評論集（エッセイ）

\*<sup>5</sup> 朝日オピニオン&フォーラム に東京をリデザインする の見出しにて建築家ホルヘ・アルマザン（1977生まれ。慶應義塾大学准教授）の東京の都市計画論が載った。見出しに「人より車優先の都市」「企業主導の巨大開発」「公共空間が足りない」とあり、私はこの見出しでピンと来て、私が昔から考えていたことと一緒に飛びついて読んだ。そして同感々々

と膝を打って気を晴らしたのでここにエッセイとして投稿します。記事の真中に横文字で「歩道橋を撤去憩いの木陰づくり 人生を楽しむ場に」と大見出しが書かれてある。見出しだけで私はこの教授の云わんとしていることが分かったし、それは私の長年鬱積していた思いを晴らしてくれるので、私のことに引き付けてメモする。こういう意見が日本人の知識人から出ないのを憂いていたので溜飲をさげる気持ちでメモする。この人はマドリッド工科大学の修士課程を出て二〇〇三年に来日東工大で博士課程修了09年から慶大で教職に就き建築デザイン研究室のスタジオリボを主宰しているとある。ちよいとこの俳誌と関係ないよと言われそうであるが、私が勉強した建築学と無関係でないので敢えてここに寄稿するのである。私の履歴を書くようなことになりませんがどうか一読下さい。その前に彼の四つの提案を以下に挙げる。一つ、幹線道路の再編。歩道橋を撤去、車線を減らして歩道を広げる。歩行者優先した幹線道路の再整備。二つ、首都高速道路の見直し。運河や河川を覆っているものは撤去する。三つ、木陰を増やす施策。四つ、公開空地をビルの足元に設けることを条件に容積率を緩和したのを止める。今の公開空地での飲食の禁止を止める。今後は開発業者には公共

空間の整備に充てるための負担料を求め。以上の四つの提案。彼はニューヨークのタイムズスクエア、パリのセーヌ河岸の再生、バルセロナの成功例を挙げて東京も変貌できる、都市生活の質の向上を求め、と書いて励ましているようだ。(ここまで打ち込んだら私のことを書くのはもう必要ないように思えてきた。日本はどうして外国の人に指摘されないと気づかないのか、実行できないのかとここでも思うところだ。何故西洋の真似ばかりするのか。我が国のいいところに何故気づかないのか。やっぱり書いて置く。私の高三の教科書に載ったブルーノ・タウトの桂離宮のすばらしさを指摘した文章に魅かれて工学部なら建築学だと思いい受験したのであった。入ったらすぐ古本屋で桂離宮の本を買い、年が明けたら京都まで拝観に行つた。後はやめておこう。いやもう少し。序に京奈良の仏閣を見て回つた。上京して驚いたのは川の上に高架を立てて道路にして川を覆い隠していること、日本橋などはその下にかかっているのであった。そして超高層だと云つて百メートルのビルが競争のように建ちはじめ挙句、人の住むマンションも高層化していつて現在に至っている。人間に寿命があるように建物でも永久のものはない。先々どうするんだらうと思う。建築土木など地上のものは皆政治経済と深く結びついているから、ただ造るだけの問題ではない。科学の問題だけではない。人間の営みの本質にかかわってくるのではないか。今俳句をやっているその根拠と学んだ建築とどのような糸で結びついたのであるか？あきら

めの哲学という言葉が鷗外に当てはめて本にした吉野俊彦氏ではないが、私もその哲学で自得したのであった。)

蕉の軽み以後 (113)

光成高志

弥生やよひも末すえの七日なぬか、明あぼのゝ空くう靡なるらうううとして、月つきは有あり明ありああけて光ひかりをさままれるものから、不ふ二にをせの峰みね幽ゆうかずかにみみえて上かみ野の・谷や中ちゆうの花はなの梢しん、又またいつかはと心こころほほそし。むむつつままししききかかぎぎりりは宵よよよりつつどどひひて、舟ふねに乗のりて送おくる。千ちじじゆゆと云いふ所ところにて船ふねをああがれば、前途ぜんず三さん千里せんりのおもひ胸むねにふささがりて、幻まぼろしのちまたに離別りべつの泪なみだをそそぐ。

行春ゆくはるや鳥啼魚とりなきうの目は泪なみだ

是これを矢立やたての初はじめとして、行道ゆくみちなほすまず。人々ひとは途中ちゆうちゆうに立たちならびて、後うしろかげのみゆる迄まではと、見送みおくるなるべし。ことし元禄二げんろくに年ねんにや、奥羽長途おくうちちゆうの行脚あんぎゃ、只ただかりそめに思おもひたちて、呉天ごてんに白髪はくはつははつつの恨うらみを重おもぬといへ共ともども、耳みみにふれてはいまたに見みぬさかひ、若生わかしももいいきて帰かへらばと定さだまなき頼たのみのみの末すえをかけ、其日漸早あやうさう加かと云い宿しゆくにいかしゆくにたどり着つきにけり。

まず曾良の奥の細道随行日記には三月廿日深川出船、巳刻千住三揚しんじゆうとある日にちの相違が問題になつて論じられたことがある。私の手元の芭蕉翁編年誌(S33)には七の字を脱すとある。これには異論があつて、曾良の日記の

冒頭から間違う筈がない、二字下げて書いてあるし、次の行からは一と書く簡条書きにしているのだから、深川千住間の旅程をそれ以降の旅程とはつきり区別して書いている。曾良が第一歩の日記から書き間違えるということはありませんとするもの。私もそう思う。芭蕉と曾良は<sup>3.20</sup>の日の出に深川を舟に乗って出発し巳の下剋、今でいう午前10時20分から11時頃千住に着いて舟から揚がった。<sup>(一)</sup>巳の下剋と云う時刻について付記する。一日をおよそ二時間ずつの12の時辰<sup>じんに</sup>に分ける時法である十二時辰<sup>じふにじんの</sup>の一時辰を40分毎の三刻に分ける。この3刻を早い順に上刻、中刻、下刻という。十二時辰を十二支に割り当てることで24時間を表現する。巳は子から6番目だから0246810と数えて午前10時、そこから一時間前の9時から40分後<sup>(9)</sup>までが上刻、そこから40分後<sup>(10)</sup>までが中刻、そこから40分後<sup>(11)</sup>までが下刻、よって先の時間になる。日付は陰暦で書いてあるので間違わないように読むべし。<sup>3.27</sup>日は陽暦では五月十六日。月日は百代はくたいの過客<sup>か</sup>か<sup>く</sup>にして、行ゆきかふ年もまた旅人也。この冒頭の文は読み返す度に心震える、これは喜びか怖れか感動と云うのかいまだに感慨がわいてくる。それを通過してここから旅立ちの具体像が語られる文になる。奥の細道ほど研究書の多いものではなく、注釈本もおびただしい数に上る。漢詩文の典故についても重箱の隅をほじくるほどに悉く挙げ尽くしている。今ここでは芭蕉の立出の日付の穿鑿をしている。手元の栗田勇著でも迷われていたらしく、よく

読むと矛盾がある。即ち、実際の深川立出の日付は、落楮宛書簡(元禄二年三月二十三日付)に「此の廿六日、江上<sup>じょう</sup>を立出候」とあるから、雨に降られたので一日延ばして二十七日にしたと思われる、と書かれ、その20頁後に竹下数馬『芭蕉マンガラの詩人』の説を採用して、三月二十日から二十六日までの空白の一週間は南千住の素盞雄<sup>すさのお</sup>神社の行屋<sup>ぎやうや</sup>に籠って精進潔斎の籠りの行をして翌日の二十七日に立出した、と書いている。その証拠には四月二十六日須賀川に滞在している芭蕉が、江戸の杉風宛てに書いた手紙がある。「・宗吾(曾良のこと)、無事二達者被致<sup>いたされ</sup>候。道々泊々、其元<sup>そのもと</sup>の事のみ申出候。先月<sup>さきづき</sup>けふは、貴様御出候。たれより忝<sup>かたじけなく</sup>候などいふ事のみ泣きいだし候。深川衆へ御心得可被成<sup>なまら</sup>べく候。方々故、態<sup>ま</sup>とたれへもたれへも書状遣し不申候」。三月二十六日に杉風は不自由な体で、千住で行われた直会<sup>なおら</sup>の席に、わざわざ出向いてくれたと、芭蕉は泣いている。『おくのほそ道』にも「むつまじきかぎりは宵よりつどひ」とある。これも出発前夜の直会<sup>なおら</sup>の会のことであったと。栗田さんはこれですつきりして次の室の八島へ行っているが、私はすこし納得するのを躊躇する。「むつまじきかぎりは宵よりつどひて」とあるのは千住での直会の事であるとされているが、文に沿って読むと深川で舟に乗って立出するときのことで、すぐ「舟に乗りて送る」

が来て切れ、次に千じゅと云所にて船をあがれば、と足早に書かれています。親しい人々は最初の宿場まで送るのが当時の慣例であったから、皆舟に乗りて千住まで見送りに来たのだ。そして籠りの行に入ったと思われる。千住は日光街道の初めの宿場、東北へ行く玄関口である。東海道のそれは品川宿である如く。日本橋から二里。陸路をとれば、日本橋から馬喰横山・蔵前・浅草御門・千住小塚原・千住大橋・日光街道と行くのだが、舟で隅田川をのぼるほうが楽であり速いから通常の道筋に従ったのである。ここで蛇足になるが、私が上京して常磐線通勤をしていた頃、車窓近くに大きな地藏様が見えるのをなんだろうと思っていたのが、俳句を作るようになって方々を吟行して歩いた時、南千住駅すぐ近くの地藏は首切り地藏と言われる小塚原刑場跡であることを知った。隣接して延命寺という寺に墓石が並んでいて、中に吉田松陰や頼三喜三郎の墓があった。鼠小僧の墓もあった。ここから国道4号線に出る通りは骨通りと呼ばれている。北に進むと素戔雄神社が見えその先に千住大橋が見える。橋のたもとに「おくのほそ道矢立初はじめの碑」が立てられていて、この辺が千住宿の船着場だった。芭蕉一行はここで舟をあがったのである。旧街道に入り、旧やつちや場を通り抜けると、千住の中心街の宿場町通りとなる。問屋場跡、貫目改所跡、本陣跡、高札場跡などの石碑があり日光街道の宿

場の名残をとどめている。私は鷗外のお父さんの医院跡があるというので、ついぞに探し千住大橋迄歩いて芭蕉の足跡を訪ねたことがあった。また反対側の荒川土手まで歩きその下の名倉医院の長屋門に入って見た後、駅まで歩いて帰った。名倉医院は今整形外科のクリニックとして有名であり、駿河台にもある。千住に居を構えたのは芭蕉が千住を通過して30年くらい後のことであるが、代々子孫に恵まれ現在も医業を営まれている。丁度順天堂と同じように。千住は私の草加時代の隣町であったので懐かしくつい余計なことを書いてしまった。私がずっと考えていたのは、芭蕉のこの旅の目的は何であったのかということである。月日は百代はぐたいの過客わがににして、行ゆきかふ年もまた旅人も、と書き出して格好とっている場合じゃないよと後世の私の今は云いたくなった。野ざらし紀行、笈の小文では吉野を詩歌の聖地として西行の跡を慕ってお参りしている。伊勢にも何回もお参りしている。考えている時、手元の芭蕉解体新書（平成9年・雄山閣出版）の中の「芭蕉の信仰の深層と表層（深澤忠孝）に巡りあった。著者は上京前まで須賀川に過したという。芭蕉が『おくのほそ道』の旅で一週間留まった町であることから高校の授業では『おくのほそ道』を習うのが伝統になっていたというのである。氏は本文とは別に曾良の『随行日記』を読んで興奮した。何故って氏の記憶にあった寺社

の名が書かれてあるしその一つの田村神社の神主に伯母さんが嫁いでおられた。お母様と伯母への鎮魂を籠めて芭蕉のことを書きたいと思っていたので、この出版社からの依頼にて芭蕉の信仰、宗教観という課題に対峙したという序文がある。かなり気持ちの入った論文である。竹下数馬氏の『芭蕉マンダラの詩人』の曼荼羅マンダラは未読であるが、栗田著ではこの説に共感を覚えるとして既述のとおり<sup>320</sup>、<sup>327</sup>の空白の一週間は旅立ちの準備として精進齋の籠りの行を近くの素戔雄神社で行っていたとの推定に納得されている。当社の開祖（初代）は黒珍である。黒珍は修験者の靈僧であったという。靈僧と云うのは徐霊のできる僧のことで、神道でのお祓いと同義である。芭蕉は『おくのほそ道』の旅で、日光山をはじめ、羽黒山、月山、湯殿山よりなる出羽三山をめぐるっている。羽黒山は観音信仰、月山は阿弥陀信仰、湯殿山は大日如来信仰を中心としている。元来、出羽神社は、出羽国の国魂神くにたまがみを祀る神社であった。それが神仏習合の信仰によって、修験道羽黒派の本山となったが、崇峻天皇の第三皇子・蜂子はちこの皇子を開祖とし、日本の代表的な修験道の本拠である。私は芭蕉のおくのほそ道のほんとうの目的はなんであったのか考え続けている。野ざらし紀行では吉野に西行の跡をたずね、笈の小文では杜国を同道してまた吉野行脚、奈良大阪を越して須磨明石に行き須磨に泊って

いるが、源氏物語や平家物語を仄めかし、特に一の谷の合戦で平家が破れその時の騒ぎ追われて舟に逃げるさまを見て来たように、千歳の悲しび、此の浦にとどまり、素波の音にさへ、秋多く侍るぞや、と書いて小文を終えている。芭蕉の心奪われるものは、歴史上敗者、滅んだ者である。平泉の「夏草や兵つはものどもが夢の跡」のつはものは義経、弁慶、兼房、「笈も太刀も五月にかざれ昏職」の句の佐藤継信、忠信兄弟（私は善光寺の庭にその墓があったのを見た）、「荒波や佐渡によこたふ天の河あまのがは」は直接の名前は無いが、流刑地としての佐渡を悼んだ句ともとれるし、（私は順徳天皇の配流の地である田の中の一画を訪ねたことがある）、「むざんやな甲の下のきりくす」も平家物語に書かれた齋藤実盛を悼んだ句である。急ぎ結論を書くとおくのほそ道の目的は西行が書いている「松島ノ上人ノ事」すなわち「見仏上人」を慕う気持ち、それと修験道のメッカ、出羽三山巡礼にあった。私は東日本大地震のあった翌年出羽三山をめぐるJTBの旅にて羽黒山、月山の八合目までのぼった。羽黒山の投句箱にての句が入選したと芭蕉の羽黒の4句の書かれた板が送られて来た。これを表紙に載せた。出羽三山は関東のどこの神社でも大きな碑が立っている。修験道の御山とは修験道の聖地の事で、おくのほそ道では日光の二荒山つまり今の男体山と出羽三山を指すのである。

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。161号をお納めいたします。カラーだとやはり写真が映えますね。なかなか本を作る人もそうおらずもしどなたかいらしたらご紹介いただけるとありがたいです。みちさんよろしくお伝えください😊(25 木戸敦子)。高志兄敏子さま体調くずしていませんか。予定していなかった帰省にほんとうにおつかれさま！何年ぶりに逢えていろんな話せたことと忘れないことと思います。健三兄も私達の話し声に喜んでいると思います。こんなに良いお葬式は最近では無いですから天国から見守ってくれると思っております。何だか残った私達は気がぬけて今はさみしくなるばかりです。兄さん敏子さまほんとうにありがとう。子供達に心遣い下さりおみやげまで頂いて温かい心づかいに感謝しています。季節が日々進んでいる今日お体大切にお過ごしください。とりあえずお礼まで。家の庭で取れた甘夏です(33 拳)。朝の明るさが早くなり春を感じられるようになりました。健兄は大往生の人生でしたと思います。寂しくなりました。私達3人になりましたが、兄の人生に学んでがんばりましょう。生老病死は人間に与えられた宿義だから自分のしつかり生きて行かないと、考えました。白金葭ありがとうございました。兄の手紙読めて良かったです。房代さんのすばらしい絵ですね。敏子さんにはほんとうに

何時もながら心づかいありがとうございます。感謝しかありません。高志さんの光は敏子さんなくてはならない人です。たいへんだと思いますが今後ともよろしくお願ひします(敏子さんへ)。身体も万全ではないとの事心配です。顔が少しむくんでいるので気になっていました。どうか二人共身体に気を付けて少し休みながら無理せず暮らして下さい。俳誌毎月でなくても良いけど読みたいです。福兄の時はそうではなかったけど、健兄の時は何日も心から兄の事がはなれませんでした。母が毎日7人の子供の事ばかり祈っていると云った事があります。私も皆の幸福を願って朝夕祈っています。由美子さんは信心の家に嫁に行ったのでそのまま家の信心を受けついでみたいです。兄の後の事は由美子にまかせると云ったので由美子さんの通りに千恵子さんも賛成だったみたいです。大事な事は全部お姉ちゃんでしたと千恵子さんは云いました。(3.10 幸子)。高志おじさん敏子おばさんこの間は遠い所お疲れ様でした。楨田のおじさんも亡くなりとても悲しく思います。僕はお一人に出会えて嬉しかったです。高志おじさんも敏子おばさんもお元気そう良かったです。また敏子おばさんと少し話せたので良かったです。それから壹萬円いただきありがとうございます。靴を買いました。「スニーカー」おじさんから頂いたお金で買ったと思うと大切にはけますし、型にも残るので靴にしまし

た。ありがとうございました。母親は大切にしていますので安心して下さいね。お二人ともお元気でいて下さいね（<sup>3.10</sup> 伸明より）。前略高志兄さん白金葎届きました。健三兄は自分の命が解つていたのかな？そんな最後の手紙でしたね。葬儀から早や一週間過ぎこんなことが起ころうとも変わることもなく日が昇りそして沈むこれを繰り返している。日が沈んでいった日も何もなかったようにまた昇る。年取つていくとこの事がとつても早く感じて日々さびしいけど陽はまた昇る。寒い厳しい冬も終わり暖かい春がやってくる。健三兄と昼食を食べたりお茶しながらおしゃべりして帰ることも出来ません。高志兄さんは遠くてお茶することも出来ません。自分ではどうにもならないこと考えても始まらない。気持ちを切り替えて一日一日体を大切に過ごして行こうと思っています。高志兄さん敏子さまどうぞ二人助け合つて元気で居て下さいね。心より祈つています。乱筆ごめん下さい。お礼まで（<sup>3.10</sup> 峯子）。（とりあえず兄のことを追悼文としてメモしましたので、お読みください。身内のことながら私は生活が則ち俳句生活つまり文学・学問だと思つていますので、ありのままの私を文章にしています。お便り広場はそういうつもりで皆掲載しています。健兄のこと（一）私は健兄とは11歳も年下。私が中学の時養子に行かれた。小学生の頃ちやぶぶだいで食事を共にした。兄はいつも正座であった。働きに出られ給金は母に差し出され母はいつも仏壇に供えられた。母は兄の優等の賞状を沢山持つておられ自慢されてお

られた。中学を卒業される頃父の急死に合い学業を断念され働きに出られたのだった。私が高校に行くというので机を作り家に来て一日で作つて帰られた。私が読んだ鳴門秘帖や親鸞などの分厚い本は兄が買って来たものだった。私が上京して当地に住むようになってからは盆休みに帰省した時に会える程度。母や他の兄姉妹は一度は我家に来て泊まった事があつたが、健兄にはそれがなかったので、大分経つてから新木の家へ来てもらった（二〇〇七）。両国の大相撲と国立劇場の観劇に案内して三泊四日にて帰られた。本誌を創刊してからは我孫子日記に私の動向と句を載せていたので、兄には毎月送つていた。兄からはそれに答えた俳句と手紙が来たので兄の生活はここでもよくわかつた。あれから十年後の平成29年（二〇一七）私の思い付きで奈良の法隆寺を参拝する旅を提案し、姉妹にも参加してもらつた。今年は二〇二五年だからあれから八年経つている。お元気であつたので今度は近くまで出かけて向こうで兄姉妹会をしようとして一月末にメモを入れたのだが、果たせなかつた（つづく）。孫の中学卒業式に参列してきました。二年間の成長を感じました（<sup>3.16</sup> 正美）。光成さん、いつも白金葎を送付していただき有難うございます。藤原秀臣様が投稿されております、「老化を楽しむ」を拝読しました。皆様の文章の表現にはただ、感心させられます。我々も日頃から、スポーツや会話を楽しみ、各自趣味を楽しんでいられることかと思ひます。いつまでも、元気で、ノホホーンと生活をするようにしてきます。3月の句会に駄作を下記の通り、投稿させていただきます宜しくお願ひ致します（<sup>3.17</sup> 寿幸）。長い間お世話になりました、今月で投句は終わりにします。今月の

選句は都合が悪くできません。よろしくお願ひします(3.18 敦子)。(ほんとに長い間のお付き合いありがとうございました。萱吟行句会から三二次みぎ部長や内藤博士と同じ会社と知り驚きました。が、それ以来の俳友でした。敦子さんとの思い出は沢山あります。コロナ禍でメール投句になり私がせつかなもんですから、付き合うのも、苦労されたのかなと推測します。気が向いた時があつたら投句下さい。これでお別れではありませんよ。私の心は皆さんが思っている以上に広くそして深いのです。高志)

### 我孫子日記

|    |              |         |
|----|--------------|---------|
|    | 2/21         | 句会      |
|    | 2/24         | 健兄の訃報来る |
|    | 2/25         |         |
| *1 | 9時出→15時福山→通夜 |         |
|    | 2/26         | 健兄の葬儀   |
| *2 | 帰京→我孫子       |         |
| *3 | 白金霞二月号投函     |         |
|    | 2/28         | スズキ車直る  |
|    | 3/13         |         |
|    | 3/14         |         |
| *4 | 千駄堀吟行        |         |
|    | 3/16         |         |
| *5 | アビーサ         |         |
|    | 3/21         | 句会      |

\*1 壁をなす雪べつたりと伊吹山

新幹線京都を過ぎて陽炎へり(みち)

春興や亡兄家族三十人

通夜の席幼子はしやぐ春灯(みち)

亡骸の兄に口紅春の葬(リ)

2 訣別の兄の骨上げ下萌ゆる

卒寿過ぎの義兄の葬儀春灯(みち)

\*3 崩場がればには残雪の白伊吹山

\*4 水温む水より出たる石乾く(みち)

中洲には鴨の子育て勤いそしめる(リ)

仏の座畑一面染め尽くす(リ)

接骨木にわたこの花芽が坊主頭とは(リ)

接骨木にわたこの蕾が解ほれ初めてをり

竹の秋安蒜家あり本家あり

菜の花や長き貨物の武蔵野線

森近しミモザなだるゝ塀の外

森の道大き巣箱が目に入る(みち)

すぐ傍の川鶉人見て動かざる(リ)

日時計の周りパンジー植え終る(リ)

犬ふぐり畑に育ち盛り上がる(リ)

山笑ふ昼を知らせに来る鴉(リ)

縄文の堅穴に來し卒業生

縄文の家より出でて春暗し(みち)

\*5 高齢者住宅アビーサの軒下の鉢莖咲く

ソーラーパネル高齢者住宅アビーサの枯畑に

### 編集後記

はや三月が去ろうとしている。実兄が亡くなった。

本誌の資金援助もあり、慣れない俳句の投句もあった。

追悼文を来月まで書いて謝意を表したい。扱て、璃子さ

んの句集を読んで二人で選句している。句が奥深く感

歎措くことあたわずです。百二歳を越えられた璃子さ

んまたお目にかかりに伺いますよ。

白金霞3月号(通巻162号)誌代一部千五百円(年会費一万五千元)

郵便振込口座一〇五二〇一四二二二三六一名義シロガネヨシ令和七年

3月23日発行 編集発行人 光成高志 発行所 〒270-1119 我孫子市南

新本2・14・17 光成方 投句先・メール又はライン)印刷製本 喜怒

哀楽書房〒950-0801 新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊

三&3.20の白金霞&3.27の福山城&芭蕉の出羽三山の句&中原淳一の挿

絵(璃子さんからみちさんが貰った「乙女の港」より) & 璃子さんの句の選)